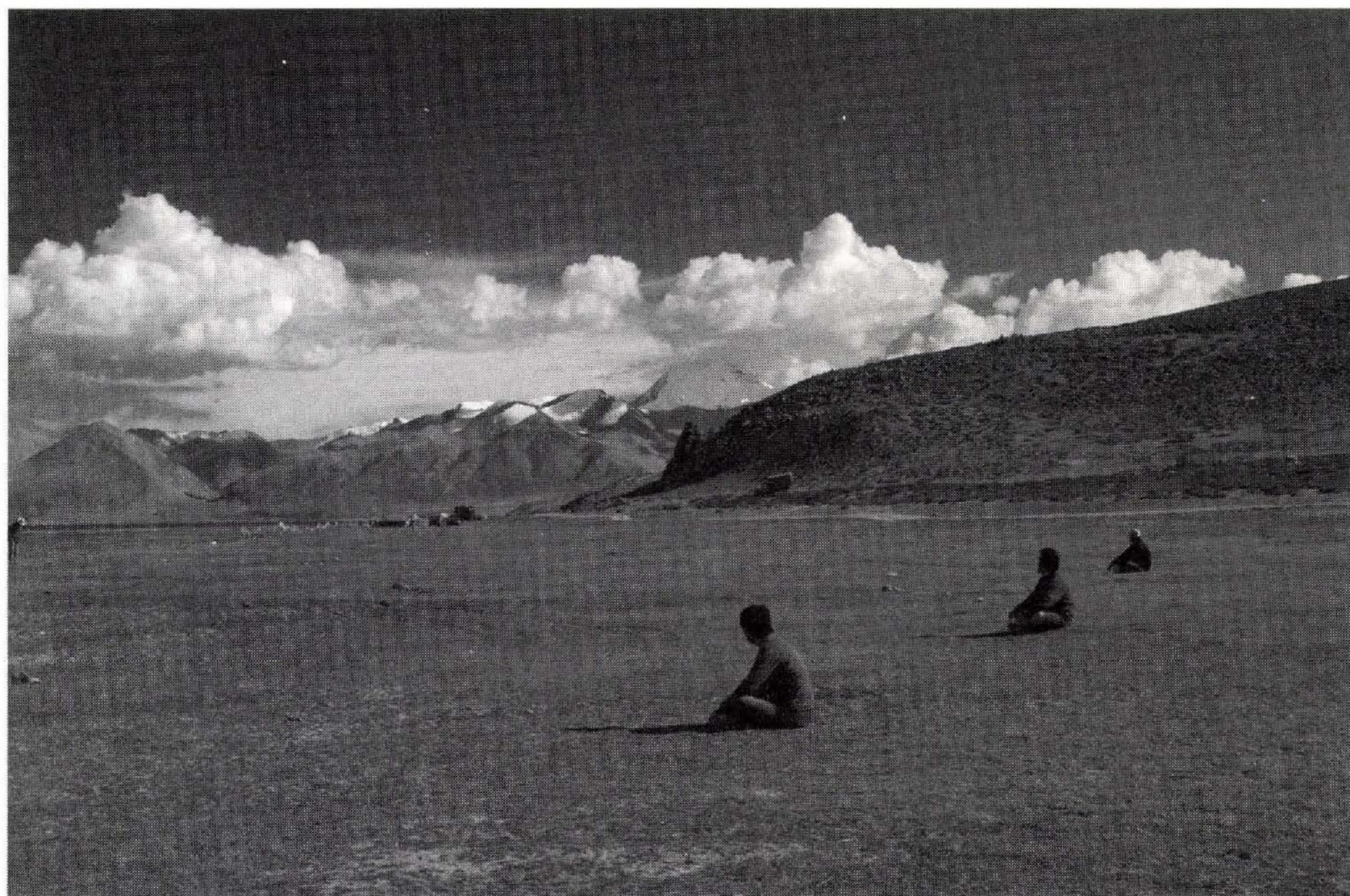


# 針葉樹會報

第107号  
2006年6月



目次

中山道を行く	山崎	擴		
山頂駅からの山歩き	小島	和人		
カイラス紀行				
—ドルマ・ラで般若心経をよむ	原	博貞		
安達太良山から				
鉄山経由箕輪スキー場へ	齋藤	誠		
三月会通信				
英文ジャーナル・日本山岳会百周年記念号	15	12	5	3 2
Japanese Alpine Centenary 1905–2005				
編集後記	中村	保		
表紙写真＝チベット、マナサロワール湖畔にて雲のカイラス 撮影・原博貞	24	23		
を遠望				

発行日	2006年6月20日	編集人	有賀 盈
発行者	針葉樹会	〒	150-0012
印刷所	ヤマノ印刷(株)	渋谷区広尾	3-9-22

## 中山道を行く

山崎 擴（昭23年卒）

人生八十年を過ぎると、これまでの行いの結末が明らかに見えてくる。たとえばこれまでの登行でどれだけの高度を上がつただろうか。恐らく数十万メートルはあろう。宇宙ステーションにも達しようか。随分とむだなことをしてきたものだ。

これからは宇宙を這い上ぐるのをやめて、平行移動を心がけよう。そう思つて、手始めに甲州街道へ。小仏峠から上野原、野田尻から犬目、鳥沢まで行つた。けつこう面白かつたが、後がつまらなうなので長づきしそうな中山道へ向うこととした。

とはいっても板橋から関東平野を歩くのもばかりしていると勝手に決めて、第一歩は碓氷峠からとした。石井と一緒に鼻曲山を越え霧積温泉に泊り、坂本宿まで送つてもらい峠にかかる。新緑の季節もあり、十キロほどの山道は結構歩きでもあつて楽しかった。

しかし遊山の旅とは異なり、昔の旅人にとっては難所の一つであつたであろう峠下の急路には、皇女和宮の行列のためにゆるやかな迂回路も作られていた。

第二回ははやくも佐久である。軽井沢、沓掛、追分などを省略したのは当初からの思想に矛盾しないためである。佐久は大先輩出生の地と聞く望月町。四月から佐久市に合併したようだ。鉄道の通らないこの町は旧道沿いに昔の町並みをとどめて懐かしい思いがする。旧道とバイパスである自動車道との合流地点で少し迷う。このごろは町にも田畠にも人の姿がなく、道をきこうにも相手が見つからないことが多い。高齢化のためだろうか。

ようやく旧道の入り口をみつけて、茂田井宿へ向う。ここは間の宿場であつたので、いまでも小さい部落であるが、白壁作りの酒造屋が二軒もあつて落ち着いた雰囲気である。

佐久の中山道はかなり自動車道路に呑み込まれた部分もあるが、旧宿場である部落では本陣跡などの旧跡をとどめて保存に力を入れている様子も見えてありがたい。

今日の行程は芦田、長久保の宿場をへて和田峠の麓である和田宿まで十八キロ、急がねばならない。

和田宿のなかほどで小母さんに話しかかれ、一人旅の人恋しさで立ち話をしているう

ちお茶でもとさそわれ、あわてて宿に向かう。宿は役場に紹介された村に一軒の宿屋である。前に立つと、低い二階屋に連子格子をたてまわし、鍋炭色にくすんだ色合いといい昭和の建物ではあるまい。今日たどつてきた宿に保存されている旧家と変わらない。どうやら中山道歩きにどっぷりひたれそうである。

翌朝は握り飯をほうばつての早出である。これから登る和田峠、下諏訪までの二十一キロは道中一の難路である。高度差も約七百メートル。とあれば、平行移動などともいつていられない。途中旧道に入るとなかなか良くな整備され歩きやすい。もう人家はなく峠下の「東餅屋の茶店」といいたいが、実はさびれたドライブインがあるのみ。そこでコーヒーを飲んでいると一人番をしている親父さんが拙宅の隣町・茅ヶ崎の出身であるという。おかげで名物の黒曜石を安く分けんもらつた。風呂に入れると暖まるという。矢尻の材料としてかつぎ歩いたであろう縄文の狩人たちは気づいていたろうか。

峠の頂上は車道のトンネルの遙か上、少しあけて明るい。訪れる人も少なかろう。なにしろ今朝から会うのは車だけで、歩いているのは一人もないのだ。御岳遥拝所がある。

こののち歩いた塩尻峠にも鳥居峠にもありました。お山は見えずとも、近づいてくる目的地に心はずませて歩いたのである。

さて下りにかかると、路は一変する。ほとんどふみ跡に近い山道である。さきの店番にいわれたように諏訪側はほとんど整備されていないのだ。携行しなかつたストックが欲しい。所々に立ててある旧中山道の標識が唯一のサービスである。だいぶ下つて国道にでる。ほつとする間もなく、白ペンキでわずかに区切られた歩道を十トントラックに耳をこすられそうになりながらの歩行である。これはかなり命がけだ。

ようやく道幅が広がり、歩道も独立すると、広がった谷間は生コン・アスファルト工場やゴミ処理施設、中古車解体工場など都会の汚れを引き受ける大きな施設が続く。旧道もすべて国道の下に埋没している。どんどん下つてあと諏訪まで二、三キロというところで、はじめて部落にでよう。疲れと予定の列車に間に合わせるために、見つけた公衆電話でタクシーを呼び、上諏訪へ。諏訪大社は素通りして次回の楽しみとする。

つぎの下諏訪からはまた石井との二人旅となり、塩嶺を越え木曽路の入口へ一泊二日の旅をかさね、年末には南木曽まで達した。

寒いうちは休みで、陽春には妻籠から美濃路へはいろう。酷暑は避けるとしても、年末までは琵琶湖を見られるであろう。来年の正月は舞妓さんと完歩祝いをしよう。

いい遅れたが、この旅行のガイドとしては学研の『木曽路をゆく』全六巻を使っている。道路や史蹟の解説もさることながら二万五千の地図をベースにした旧道の指示が赤線で図上にしめされていて、これに従つて歩けば間違いないという優れものである。

山頂駅からの山歩き

小島 和人（昭40年卒）

大学を卒業してから41年が過ぎました。同僚諸兄、諸先輩、皆様ご経験と思いますが「良く生きてきたなと感心し、早いものだと驚いている」この頃です。山本健一郎先輩の温かいお誘いを頂き今年から三月会に参加させて頂いておりまして、針葉樹会の皆さんとお付き合いさせて頂くのも昭和49年、米国駐在から帰り、平川紀男君の慰靈で奥又に入つて以

来ですから32年振りとなります。

先月の三月会で山本・有賀両先輩から「何でもよいから針葉樹会報に寄稿しろ」との厳命で、お酒も入つて断りきれずに帰つたところ、翌朝、有賀さんのメールでの追い討ち、この30年間のご無沙汰がわりに近況などご報告致したいと思います。

富士通の会社生活の最後ということでここ数年、また米国勤務をいたし、昨秋帰国しましたところ、同期の坂井（旧姓山本）溢弘君が「歓迎会を天山でやるぞ」と誘ってくれました。天山は箱根湯元の温泉宿だとわかり一安心。その天山で同期の半場三雄君、一年後輩の池知昭洋君と一時間半も湯につかり、のぼせかけたところで小田原に下り、山好きの（トーチン会）蛭川隆夫・長沢道彦・本間浩の諸兄と合流、魚屋の二階に上がりこんでコンペ。これが針葉樹会復帰の歓迎会でした。この会の企画者、坂井君の学生時代は悠久の中国を思わせる青年で、とても細かく気のつく今の坂井君とは両極の人でしたから40年の重みを実感した楽しい一夜でした。

しかし、この40年の間に開発された坂井君のイベント企画力はこの程度のものではありませんでした。今年に入つて「梅の宴と幕山&城山ハイキング」と題された、大学ノート

の紙3ページにびつしり書き込まれた手書きの企画書が配布されました。これは今時めつたにはお目にかかる代物で、この手書きの企画書の故に、広島から村上泰介先輩が駆つけたほどです。

名幹事の下、先に小田原で集まつた面々に高橋信成・竹中彰の両先輩、原博貞・佐藤久尚・中村雅明の諸兄が加わつて総勢12名で真鶴の民宿・潮騒新館の大広間、3月4日の夕刻は大いに盛り上りました。

三艘の大型舟盛りが並び宴会が始まるや40年の時間は一気に飛び、乾き物と二級酒で酔いしれた国立の部室と変わらぬ態となり、一升瓶と御跳子と焼酎の空き瓶がテーブルの上に山となりました。

翌朝、頭痛は残りましたが、不思議なことに不快感は無く、感傷のような安らぎを感じていました。しかし40年の重みは、早朝に駆けつけた佐藤力君、池知昭洋君を交えて幕山に登り始めて出てきました。たつた500メートルの高低差でしたが約2時間かなりの厳しさを感じましたし、上り口の公園を蔽つた梅の美しさも曇つて見えていたのではないかと思います。全員の合意により、幕山から下りた後、城山は次回送りとなりました。

その後4月に家族と佐渡に旅行しました。新潟に行く新幹線の中で観光案内を娘が見せ

てくれ、佐渡にも1000メートルを超える山があることを知りました。「金北山・ドンデン山」。名前が気に入り、出来たら家族と別れう本を見つけた。JTBからの出版で「おとタクシーで頂上まで行つてみようと決めました。相川にフェリーで着いて出迎えのタクシードライバーに「金北山、ドンデン山はどうですか?」と訊ねたところ「ドンデン山は雪が多くクローズ。金北山も雪が多い上に、頂上は自衛隊の基地だから事前許可がないと近寄れない」とのつれない返事。見るだけにして温泉と肴と酒と世阿弥と日蓮と佐渡おけさに専念して帰りましたが、雪に覆われ日本海を渡つてくる厳しい風に耐えるどつしりとした山並みは心に残りました。

4月の三月会で「何處か山に行つた?」との質問に「佐渡の山を見てきました」と答えたところ「見ただけか」とのお言葉で、「会報に何か書け」となつた次第。考えて見るとこの30年、ろくな山に登つたことが無いので、さてどうしたものかと考え込んでおりましたが、偶然よい本を見つけました。9月の北海道山行に参加したいと思っておりますが学生時代の装備はサブザックとニッカズボン以外何も無い。そこで、少しずつ諸兄のアドバイスを頂きながら買い集めている昨今です。登山靴を求めて、原博貞兄ご推薦の石井スポーツを御茶ノ水に訪ねた。その際、店の奥の本

棚を見ていたら、「山頂駅からの山歩きロープウェイ&ケーブルカーで登る山」という本を見つけた。JTBからの出版で「おとなの遠足ブック」とある。「おー、これこれ」と妙に納得した。山を麓から登ることを考えるから腰が重くなる。今は21世紀だ。私も64歳だ。三浦雄一郎さんや山本健一郎さんは違うのだ!

この30年間、山はブランクであったと思つてたが、「山頂駅からの山歩き」コンセプトで考えれば、私もずっと現役であつたことになる。この本で紹介されている木曾駒には10年ほど前、二人の娘が大学生になつたのを記念して私の田舎、伊那に行き、その際早朝、誰よりも早く、駒ヶ根のケーブルカー行きバス乗り場に着いた。千畳敷について「稜線まで行つてくる」といつたら二人の娘も、そしてなんと家内までが行くと言ひ出した。天候にも恵まれ、結局、木曾駒まで4人で往復し、宝剣は長女と二人で登つた。今でもケーブルカー様様である。

家族4人で日本の3000メートル級アルプスに登つたのはこの時をおいては無い。スペイン駐在中の1986年の夏休み、家族でスイスのミューレンに滞在しマッターホルンやアイガーを遠くから見るだけでよいと思つていたわが家族を3500メートルのユング

フラウヨッホに連れて行つてくれたのも登山電車だ。勿論?この時は駅まででユングフラウの頂に向かつたわけではないが、4000メートル級のアルプスの岩山を実感出来ました。

更に米国ロッキーの4000メートル峰に家内と二人で立てたのも登山電車のおかげでした。一昨年、山々に囲まれた風光明媚な町といわれるコロラドスプリングを訪ねたのも米国先住民インディアンのネイティブカルチャーの名残と遠くからのロッキーを愉しみたいとの想いからでしたが、登山電車が1時間からずに4300メートルのパックス・ピークの頂上まで運んでくれました。4300メートルは私にとって初体験で、頂上から眺める大陸分水嶺や雄大なロッキーは實に見事でしたが、少し歩くだけで目眩を覚えました。かくして私も山頂駅からの山歩きの現役と確信し始めていますが、これだけだと、あの先輩から「志が低い」と御小言が続きそうです。それでこの連休に、もう一步進めるため愛読書にもでていた大山に行つてきました。新調した30リットルのザックとイタリア製の登山靴を試しておかねばとの思いと、以前から近くのゴルフ場から見えていて、一度行かねば神様が小言を言うかもとの思いから参りました。勿論ロープウェイを使いました。

嫌がる家内に「50分も歩けばきれいな富士山が見れるよ」と誘い、結局頂上まで、二人で約1時間40分ほどでたどり着きました。靴の調子もよく、大山阿夫利神社の裏手から塔ノ岳、丹沢山など連なる丹沢主峰の眺めを間近に愉しましたし、神社の「おみくじ」は大吉でしたし、またまたケーブルカーに大感謝でした。もつとも富士見台経由のくだりが、やはりきつく、大山不動からのくだりの階段では真直ぐ歩けなくなつた家内からは、「今後は山に行きません」との宣告を受けました。

ということは、私は今後、「温泉から見る山」に加えて「山頂駅からの山歩き」を基本に山を愉しもうと思っています。もつとも9月の北海道行きに皆さんに迷惑が掛からない程度には鍛える志は忘れずに参りたいと思っています。宜しくお付き合いの程お願い申し上げます。

数日前、あの元気な、山本健一郎さんが体調優れず検査中とお聞きしました。この駄文が世に出るころには元気になられて「志が低いな」と言われるようになることを切に願っています。

## カイラス紀行

——ドルマ・ラで般若心経をよむ

原 博貞（昭41年卒）

昨年8月、ネパールでNGO活動を行つてゐるサティというグループの会長であるKさんに誘われ、小生と同じく幽霊会員であるS君（中学同級）と共に3人でインド人相手の巡礼ツアーリに加わり旅行してきました。K会長はエチオピア、スチダム、タンザニアの奥地を好んで旅するというかなり変わつた人で、3人とも同年齢であります。

### 8月7日

成田発 バンコク泊 「稻の花 香る昼過ぎ 旅に出る」であります。

### 8月8日

午後カトマンズ着。NGOのための薬品・文房具・顕微鏡等、100キロを超える荷物の運搬終了。

### 8月9日

市内観光（お寺詣り）と巡礼グループの顔

合させ。

この巡礼ツアーハは我々のNGOの現地側主要メンバーが経営するエコ・トレッキングが主催するもので、今回の客は18名。我々を除く全員がヒンズー教徒のインド人だがインド本土人は4人だけで10名はアメリカ、1名はUKからの参加で、職業は医者、大学医学教授、医学研究員、エンジニアで所得の高い階級と思われる。アメリカでインド人を追放すると医療が崩壊すると言われるのももつともである。UKの研究員がただ一人40歳前後で後は皆お年寄り（我々も）。

エコの社長によれば、昨年は500名の米系インド人をツアーに送り込み、今年もそれ以上を予定している。いまやエコのドル箱となっている。それにしても年寄りばかり仮にも5700mに近い峠を越えさせて大丈夫か？と聞いた所「OK、OK、昨年一人死んだだけだ」と。70歳を越えてよぼよぼしているのでカイラスの麓までにしたら忠告したら「巡礼で死んだら本望だ」と言われ、峠に登る途中でアウトになつたそうだ。ウーン。

エコからはツアーリーダーとして社長の弟ロビー（彼は2年前のゴーキョ・ピークヘのトレックでも同行したナイスな青年）、タフで親切なガイドのバシュー、コックや雑用係をいれ総員6名、他にロビーの友人のアメリ

カ青年パトリックが客ともスタッフともつかない形で参加した。カトマンズからチベット国境までバスで行き、そこからは中国側がアレンジしたジープとトラックに乗り換え、中国人ガイドを伴いカイラスに向かう。

#### 8月10日

6時ホテル発。10時45分国境の町コダリに到着し昼食となる。モンスーンとの事で雨が時々激しく降る。延々と待たされ判明したのは、チベット側ゲートとネパール側ゲートの中間でトラックが横転し中国側の迎えが来られず、歩くしかないという事。道ははるかにジグザグと上っている。「ま、仕方ないな」と傘をさして歩き出すと、成る程しばらく

上った所にトラックがひっくり返り、交通を遮断している。もつとも崩れかけた片側一車線の道路に上下のトラックがギッシリ詰まっており、事故が無くても渋滞は避けられない。幸い30分程歩いた所に中国側のジープが迎えに来ており助かった。中国ゲートまで歩けば更に2時間以上はかかるだろう。クワバラ、クワバラ。

中国側通関で更に1時間待たされ、チベット入国はネパール時間で14時15分、チベット時間は北京時間に合わせている為、16時35分であった。

19

時頃、今宵の宿泊地ニヤラムに到着、宿泊所に入る。思ったより清潔な宿泊所でトイレはなんと水洗であつた。

前回のゴーキョ・ピークのトレッキングで同行者が高山病になつたが、持参の「ダイアモックス」が卓効を奏したので、今回は3人

で予防効果を試す事とし、1日250mg1錠、朝夕2分の1ずつとしこの日から飲用する事とした。おかしかつたのは、全員同じ時間に3回起きて小用に行つた事である。更に睡眠時無呼吸症候群ではないかと疑われた大鼾のK会長の素晴らしい鼾が静かになつたのは注目に値する。

#### 8月11日

昨日のゲート間移動でグシヨ濡れになつた荷物を乾かす。驚いたのはインド人のオバサンで、毛皮のコートを干していた。まあ防寒具ではあるけど。

午後は高度馴化の為、町の西の丘を登る。ニヤラムの標高が3750mだから4100m位まで上つたか。お花畑を気持ちよく登つた。

#### 8月12日

トン・ラを越えてサガへ。8時出発。我々のコンボイはトヨタのランクル5台といすゞのトラック1台からなる堂々たるもので、我々はジープ1台をあてがわれた。他のメン

バーより余裕があり特別待遇である。

トン・ラ（5120m）ラルン・ラ（5000m）を越えた所で、中尼公路から分かれる。（10時）ここから西北西に向かう。正面にシーキャ・パンマが見える事になつてゐるが雲の中で下の氷河が見えるのみ。

美しい緑のペク・ツォ湖で昼食をとり（12時40分）荒れた高原のルートに入る。高原は広くルートがどこにでもとれる為、1台のジープが行方不明になる。我々のジープの運転手がリーダー格であつた為、搜索にあたり2時間半も吹きさらしの高原で待たされたが結局、迷つた1台は先行したという結論になり、ぶつくさ文句を言いつつ次の峠を上る。これが凄い悪路でジープは飛び跳ね、小生は2個の大きな瘤を貰つた。騎馬で行くチベッタンを彼方に見、頭上には大鷲が舞うという誠に壮大な景観の中でのドライブではあつたが。

19時、サガ到着。標高は4450m。以後カイラスの麓タルチエン（4500m）までは峠以外はほぼこの高度で推移した。サガの手前のプラマプトラ河はつい先年までは船で渡っていたそうだが、今年からコンクリートの橋がかけられた。

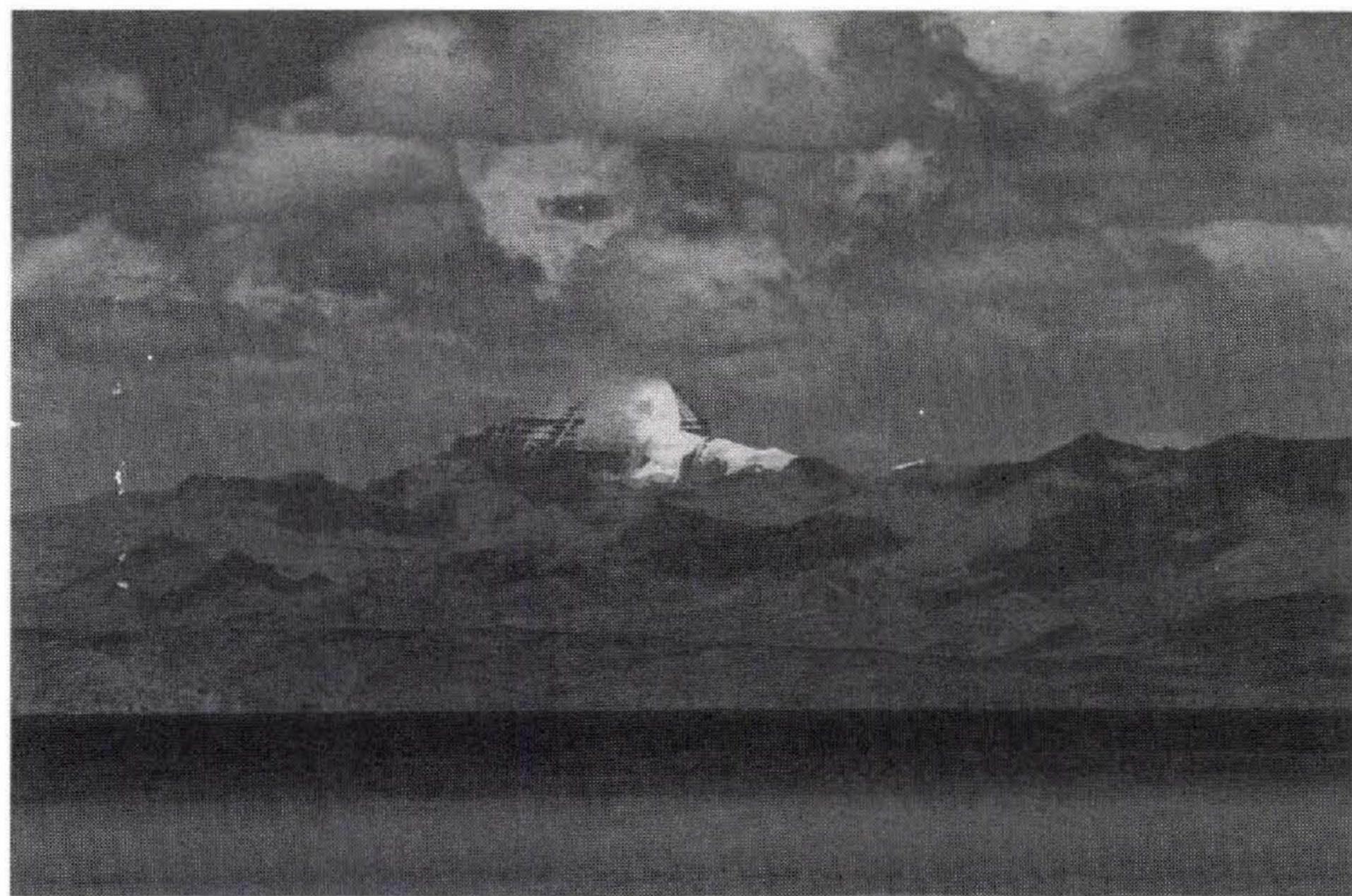
8月13日  
もたもたして出発は9時となつた。荒涼と

した景色の中のドライブで、いくつかの峠を越えて進む。右手にムスター・アタが見えるはずとガイドのバシューが言うが雲の中。マナスル眺望点もあるが国境の山が見えるのみでネパール側は雲に覆われている。

13時、旧ドンパにて昼食。政府が新しいドンパを5キロ程離れた所に建設し旧ドンパは廃れつつあるというが、そんな事はない。旅籠が数軒あり帰路は我々も泊まつた。立派な寺があり見学させてもらつたが新ドンパ建設の裏には政府の由緒ある寺への嫌惡もあるようだ。パルヤンを過ぎた所で土煙もうもうのトラック・コンボイ12台とすれ違つた。荷台には人がぎつしり乗つており足を外に突き出している。一体どこに移動するのだろう。ラサか？ 18時河原にテントを張る。我々3人に3人用テント2張り。これも特別待遇。

#### 8月14日

9時15分出発。年寄りの朝のペースは遅くなつた。11時、マユム・ラ（5216m）着。ここでカイラスとナムナニ峰の全貌が見えるのだが、残念ながら頂上は雲の中。ナムナニの南西にひろがるのはカンジエロバか？ 西は綺麗に晴れ上がり顕著なピラミッドが2個見える。根深誠さんの「遙かなるチベット」によればカメツト、ナンダ・デヴィとなるが。13時、クンギュ・ツォ湖に到着して昼食。



カイラス

腹具合が悪く（調理の油が変質している）白米と豆、茹でたじやが芋だけにする。昨日のパルヤンから先は流れを渡渉する地点が次々に出てくる。3シーザン、チベット旅行に明け暮れた次男が「行程の歩りは水の状態による」と言っていたが、往路についてはさしたる問題は無かつた。道端の大きな水溜りに大量の魚が取り残され運転手達が大はしやぎで捕まえている。よく判らないが多分サケ・マス類の魚だろう。

ついにマナサロワール湖に到着。ここはカイラスとセツトの聖地である。すなわちカイラスは男のチンポコで、マナサロワールは女性性器とされている。湖周を回れば巡礼となるが我々はあっさり車で一周。南端（ナムナニ側）で休憩中、UKから来たこの中で一番若い研究員はパンツ一枚となつて何度も頭から水に浸かり大声で経を唱えていた。

湖岸北端のチュウ・ゴンバ着17時、宿泊所に泊まる。

8月15日

入浴と観光の一日。10時に我々3人は温泉へ行く。洋式タブで個室に仕切られ湯温は41度位でなかなか快適。無論有料で一人20元とかなり高い。しかしサッパリした。インド人達はもっぱら湖で禊をしていた。

午後は車で西に1時間、仏教・ヒンズー相

乗りのチルタプリ寺院へ行つた。本来は仏教の修行の場であり赤い岩山の中腹に建てられているが、ヒンズーに相乗りされ、今はヒンズーが主流となつていて。だから我々は単に観光に来ただけだがインド人たちには大切な巡礼の一環である。山の麓には高温の温泉が涌いている。

ここへの往路、雲がすっかり上がり、カイラスが頂上まで見え、これから辿る巡礼の谷道がはつきり見えた。カイラスは東北を除く各方面に岩を廻らした怪異な眺めの山で、成る程屹立した男性性器という面持ちである。南

のナムナニ（7694m）は雄大なボリュームを誇る山で立派だ。帰路はまた雨。今宵は巡礼出発のベースであるタルチエンの宿泊所に泊まる。これは食堂や薬局がついた立派な宿泊所である。土産物売りのオバちゃん達が部屋にまで侵入し、なにか買えとナイフを振り回すので往生。K会長はナイフを購入。

8月16日

高度順化のハイキング。カイラス南面の谷を辿り、セルロン・ゴンバ寺院に行き、東の尾根を乗り越してテンネン・ゴンバに下る。どうという事の無いハイキングだが行つたのは我々3人とUKの研究員だけ、他はセルロン・ゴンバから引き返してしまった。ガイドのバシューにいろいろ面白い話（後述）を聞

かされつつ歩く。尾根の上でアメ玉を配つていたらUKの研究員がくそ真面目な顔で「貴方がたの年齢でこれだけ歩ければ私なら誇りに思う」と言い、3人で「????」と顔を見合わせた。そんなジイサンに見えるかねえ。ロビート・パトリックはトレッキングの新メニューを作るべく朝早くからこの谷をつめてカイラス南面の岩の基部をトラバースするルートを確かめようと張り切つて出て行つたが、氷に阻まれ夕方疲れきつて帰つてきた。いや、若者は元気である。

8月17日

いよいよ巡礼（コルラと言う）の開始。出発点はタルチエンから車で少し行つた谷の入り口タルプチエ。相変わらず出発が遅れ10時15分になつてしまつた。タルプチエに着くと他の巡礼ペーティがヤクや馬の奪い合いをしている。我々は完全に出遅れた。これは中国人ガイド「少林寺の王さん」の怠慢だ。出発が遅れても、人を先遣してヤクと馬の確保をしておくべきだつた。王さんは人は良いのだが無能である。

谷の入り口、右の台地は例の鳥葬の丘で上つてみようかなと眺めていたらロビートが「気持ちの良いものでは無いから止せ」と言う。やめた。

UKの研究員はイラ立つて「先に行くぞ」



左から 2人目が筆者

19歳の乙女、上下をデニムで決めたカワイコちゃんであった。名前はトマちゃん。ラサの学校に行つており夏休みで帰省中のアルバイトである。K会長に昨日ナイフを売りつけたオバちゃんの娘である事が判明した。カワイコちゃんをしてK会長は、渡そうとしていた荷物の山を減らそうとしはじめた。とたんに我々の怒声が飛ぶ。「そんな事をすると奥さんにいいつけるぞ！」トマちゃんは何度もコルラを行つており、荷物を担ぐと足早に歩き出す。「こらあ、トマ！ とまれ！」

黄金渓を過ぎると、左岸をゆるやかに登つて行く。单调な登りが続いた。途中テント茶屋で休憩。ドライ・ラマの写真があつたら欲しいと言われた。残念、ありません。雲が低くなり小降りの雨の中を上っていくと、やや!? 五体投地の巡礼に追いついた。まだ、これが残つていたのだ、本当にご苦労様です。追い越しつつ顔を覗き込むと、ニヤリと笑いかけられた。まさか観光用五体投地ではあるまいな。3m幅程の流れがあり、これは歩いて渉るだろうと見ていたら、なんのなんの、頭からザブリザブリと突っ込んで水中も投地立つようになり、幾筋もの滝が落ちてくる素晴らしい景観となる。いわゆる黄金渓である。

K会長はカメラ・マニアで重い機材持参でボートをアレンジするよう依頼してあつた。谷の入り口で待っていたボートは何と

地とするが、ヤク荷物隊も馬本隊も来ない。雨も激しくなり寒い寒い、2時間まつてやつと馬隊は来た。馬がなかなか来ず、途中まで歩かされたようで皆ヘロヘロになつていて。ロビーは機転を利かせ、荷物（テント）の到着を待つ間、他のパーテイに頼んでメス・テントに全員を入れて貰つた。

唇が紫色になり震えている奴もいれば「私の亭主はどこ？」と叫んでいるオバアサンもいる、ロビーに文句をつけている人もいる、と騒がしいのでテントの外に出ると、このテントの持ち主でツアーリーダーのノルブさんが話しかけて來た。すぐ日本人だと判つた。彼がガイドしているパーテイはロシアはペテルスブルグからの人達でタントラの一派らしい。まさかオウムではあるまいな。毎年巡礼に來るとの事だが、ロシアでチベット仏教とは驚きである。ノルブさんは日本人の客に期待しているらしく、抜け目なく名刺をくれた。7時ごろ雨が上がり、二重の虹がかかつた。

### 8月18日

8時45分出発。例の如くUK研究員と我々3人、トマちゃんが先行するが、今回はエコ・トレックのコツク達も一緒について来る。今日は最高点の峠越えをする日で、ツアーワクライマックスである。

3時50分、石を積み上げた小屋に到着。対岸がティラブク・ゴンバで、今宵はここにテントを張る。100m程下つた川原をテント

カイラスの西壁と北壁の境目から西に向かっている尾根に向かつて谷を上つていく。トマちゃんにルートを聞くと、少し先で谷は左にカーブし尾根から下りる谷のうち3本目をつめて行くとドルマ・ラ峠(5688m)だという。成る程3本目の谷は広くて傾斜もゆるく、道らしいものが遠望出来る。道は長年の巡礼路だけにしつかりして歩きやすいが、相当な高度でもあり、息を切らさないよう、ダブル・ストックでゆっくり上つていく。ヒンズーと仏教徒は時計回りにコルラをするがボン教徒は反対回りで、峠から駆け下りて来るボン教徒達が結構多い。なかには子連れもいる。「タシデレ」と挨拶すると嬉しそうに笑つて行く。

先行していたロシア人パーティを次々に追い抜いていく。若い娘が圧倒的に多く、なかなかの美人が多いが少し肉付きが良すぎるようではバテている。ロシアの社会の何が若い彼女達をタントラなどに走らせるのだろうか？

12時50分、カラフルなタルタツクが大量にはためくドルマ・ラに到着。カイラスの頂きは雲の中、急峻な壁が見えるだけ。眼下にはエメラルド色のヨクモ・ツォ湖が見える(正確には峠から少し下ったところから見えるのだが)。

コツク達がワアワアうるさい。「何だ？」と

そうそう、ドルマ・ラで知己や親戚他皆様の後生を祈つて般若心経をよむ事についていたのだ。やおら、立ち上がってカイラスに向かい朗々と？お経を読んだ。終わると後ろから盛大な拍手であつた。カラオケじやあるまいし。針葉樹会の皆様も祈りの対象にしておりますので、図らずもあちら側に移られる際にはお心を安んじられますように。

本隊らしきヤクと馬隊が下に見えてきたので、そろそろ下るかと岩だらけのやや急な斜面を下つていく。40分程下ると広い台地に出で、そろそろ下るかと岩だらけのやや急な斜面を下つてくる。40分程下ると広い台地に出で、また大休止。しかしながら本隊は見えない。そのうちロシア・パーティが追いつかない。そのうちロシア・パーティが追い越して行く。中でも可愛い娘をノルブさんが抱き抱えるようにして支え下つて来る。おや、随分な役得だねえ、と眺めていたら、パチリとウインクをして行つた。だんだん寒くなつたので河原まで下つてしまふ。15時15分、河原のテント茶屋に到着。ここから先はダラダラと川沿いに下るだけで、コルラのクライマツクスは終わったようなものだ。

「トマにはラサに残して来た子供がいるそうだ」と。へー、こんな可愛い顔をした19歳がもうお母さんか？と驚きつつ、「何歳か？」と聞くと神妙な顔をして1歳と5ヶ月だという。

聞くと、「トマにはラサに残して来た子供がいる」と。へー、こんな可愛い顔をした19歳がもうお母さんか？と驚きつつ、「何歳か？」と聞くと神妙な顔をして1歳と5ヶ月だという。

禁酒を続けて来ており飲ン兵衛3人組としては大いにストイックな旅をしてきたわけで、今宵テントに着いたら禁を破つて一杯やる事に決めている。ウイスキー「マッカラーン」は大事にセーターにくるまり私のザックにおさまっている。

2時間待つて、ようやく本隊到着。下りは急で馬は危ないと全員歩かされ、フラフラになりエコのスタッフに背負われた数人もいた。なんでこんなに遅れたのかと聞くと1頭の性悪なヤクがワザと荷物を流れに落とし、回収に手間取つたそうだ。茶屋から1時間程下つた地点でテントを張る。待望の一杯をやり、しみじみ幸せになつた。高山病予防薬の服用も今日でおしまい。

### 8月19日

9時45分、のんびり出発。1時間でミラレバ派佛教発祥の地、ズツルブク・ゴンバに到着。由緒ある寺なのにここにも屋根にヒンズーの印、トライデントが着けられている。中国政府はよほど仏教が嫌いらしく、内部のマンダラは新しく彩色が綺麗だ。

トマちゃんが言う。「昨日の赤ちゃんがいるという話、うそ。まだ学生なんだから子供がいる訳が無いでしょ」。オイオイ、可愛い顔してジイさんをからかうんじゃないよ。

この先で河原を外れ、段丘の中腹を歩いて

実はチベット初日のニヤラムから、我々は

いく。ここは体高50センチ程のマーモットの住む団地である。「クイ、クイ」と澄んだ声で鳴き交わしている。20m程が安全距離らしく、それをこえて近付くと、パッと穴に飛び込む。そこで私も「クイ、クイ」と言いながら近付くと大いに興奮して「クイ、クイ」と鳴き返し、クイ、クイ合戦のどさくさに紛れてK会長は至近距離に忍び寄つて写真をものにした。このマー モットは可愛い姿をしているが実はとんでもない厄介な代物を抱えている。

先にガイドのバシューが面白い話をしたと

いうのは、こうだ。先月サガの軍駐屯地で兵士が11人死んだそうだ。その症状がSARSに似ており、当局はすわやと駐屯地とサガを立ち入り禁止にしたが、その後の調査で兵士達はこのマー モットを撃つて食べたため罹病した事が判明し禁止令は解除されたと。新鮮なマー モットの肉を食べ11人も死ぬなんて理解できない。この話を聞いた夕方、持参の「戦争の世界史」の読みさしの箇所を開いた所、偶然にも元の南方遠征について触れていた。

昆明あたりで元軍がマー モットを捕食し、何とペストに罹患したとある。この保菌者が西への大遠征に参加し、菌が突然変異で伝染力を強め、もつて中世ヨーロッパの恐怖の源

となつた腺ペストをもたらしたというのである。そういえば、出発前、天津にいる次男からメールが入り「チベット奥地でペストが発生したという噂がある」と警告して来た。まさかと思っていたが、本当にペストだったのだ。こんな僻地でマー モットに寄生し、突然変異で世に出る機会をじつと待つていてるペスト菌、不気味ですね。現在の医療はお金による生活習慣病対策に専念し、金にならない伝染病対策には関心をあまり示さないから鳥インフルエンザの問題を含め対応力は無いと思う。怖いです。

14時頃、段丘を下り高原に着いた所でコルラは終了した。トマちゃんは一周14～15時間でコルラすると言つていたが、我々は2泊3日かけた大名コルラであった。

8月20日

インド人達の聖なる日という事で湖畔で禊と休養。

8月21日より帰路につくが、長々と記述したので省略致します。実際は車の故障や道路冠水で帰路が大変でした。深夜までのドライブは辛いものでした。我々はニヤラムまでインド人達を送った後、また中尼公路を引き返しエペレストのBCへ行く事としましたが、時間が無いためショートカットをしようとして道に迷い、夜中、雨の涸れ谷で道を探し回



安達太良山から

鉄山経由箕輪スキー場へ

齋藤 誠（昭63年卒）

期 間 平成18年2月11日（土）

（12日（日）

メンバ－ 齋藤誠 大松健一郎（非会員）

2月11日（土）

極楽くろがね小屋ツアーと銘打った今回の山行は、ゆつたりした日程、あつたかい温泉、おいしいワインのお気楽ツアーの予定だった。8時半頃、喜多方の自宅を出たパートナーの大松君は約束どおり10時に齋藤の待つ福島市の公舎に着いて、スキー場に向かう。

途中、ゆつたりとした昼食をとり、あだたらスキーサー場に着くと、時間が遅いので、駐車料金徴収係りが不在で無料で駐車できた。

13時歩き始める。ピッケルは不要と判断し、アイゼンのみ携帯。

川を渡り、丘を登り、勢至平の馬車道通り、1時間半ほど歩いた後、すれ違ひの初々

しいアベックに小屋までの時間を問えば、小

1時間もかかるもんだと歩き続けると、あに

た。結構かかるもんだと歩き続けると、あに岡らんや、30分ほどでくろがね小屋15時着。小屋の前には1組のカツプルがテントを張つていた。

て

受付を済ませると、4つのふとんに5人で寝てくださいとの厳しいお達し。2階奥の3号室。スタッフは同年代のオヤジ（どつからどう見ても俺もオヤジだよな）と学生アルバ

イト風の2人。さっそくビールで乾杯。あたりめをさかに500mlボトルに詰めた鶴の江（会津の地酒）に突入。

大分酔いが回ったところで、温泉に入る。

貸し切り。高湯温泉のような真つ白な硫黄泉。17時半、夕食。予想より貧弱なカレーにらつきよう、福神漬け。量はたっぷり、おかげり自由。ワインを飲みながら、だるまストーブを囲む。

テントのカツプルも温泉に入りに来る。

小屋のおやじが、これこれこういう人に会つた人はいませんかと遭難情報に関する調査。下山したら、大変な騒ぎになつていたことが判明。

ワインが効いてきて、早々に7時過ぎ？ふとんに入る。そんなにきれいではないが、結局キャンセルがあつたらしく、4つのふとん

を3人で使えた。

2月12日（日）

うつらうつらと眠り続ける。同室のおやじは5時頃起床。我々の朝食は6時半と指定されているので、ふとんの中で風の音を聞く。

天気予報どおりパッとしない天気か。6時過ぎ、下に降りて朝食を待つ。生卵、焼き海苔、佃煮2種、梅干しにみそ汁。例によつておかわりはたっぷり。

お湯をもらつて紅茶をテルモスに詰める。

次々とパーティーが出発していく。大パーティーの長老格は、かんじきを小屋の中で付けてはいけないと小屋番に説教されるが、めげずに再三トライしていた。他山の石とせねば。そう言えど、昨夜はくさやをあぶつて、煙を蔓延させたりもしていたつけ。

我々も出発。風の音が背中を通り過ぎるよう。前回訪れたときの強風と指・頬の冷たさが頭をかすめ、このまま帰るべきかちよつと迷うが、箕輪で妻の送迎付きの機会を逃すのがもつたいなく感じられ、とりあえず安達太良まではチャレンジすることとする。

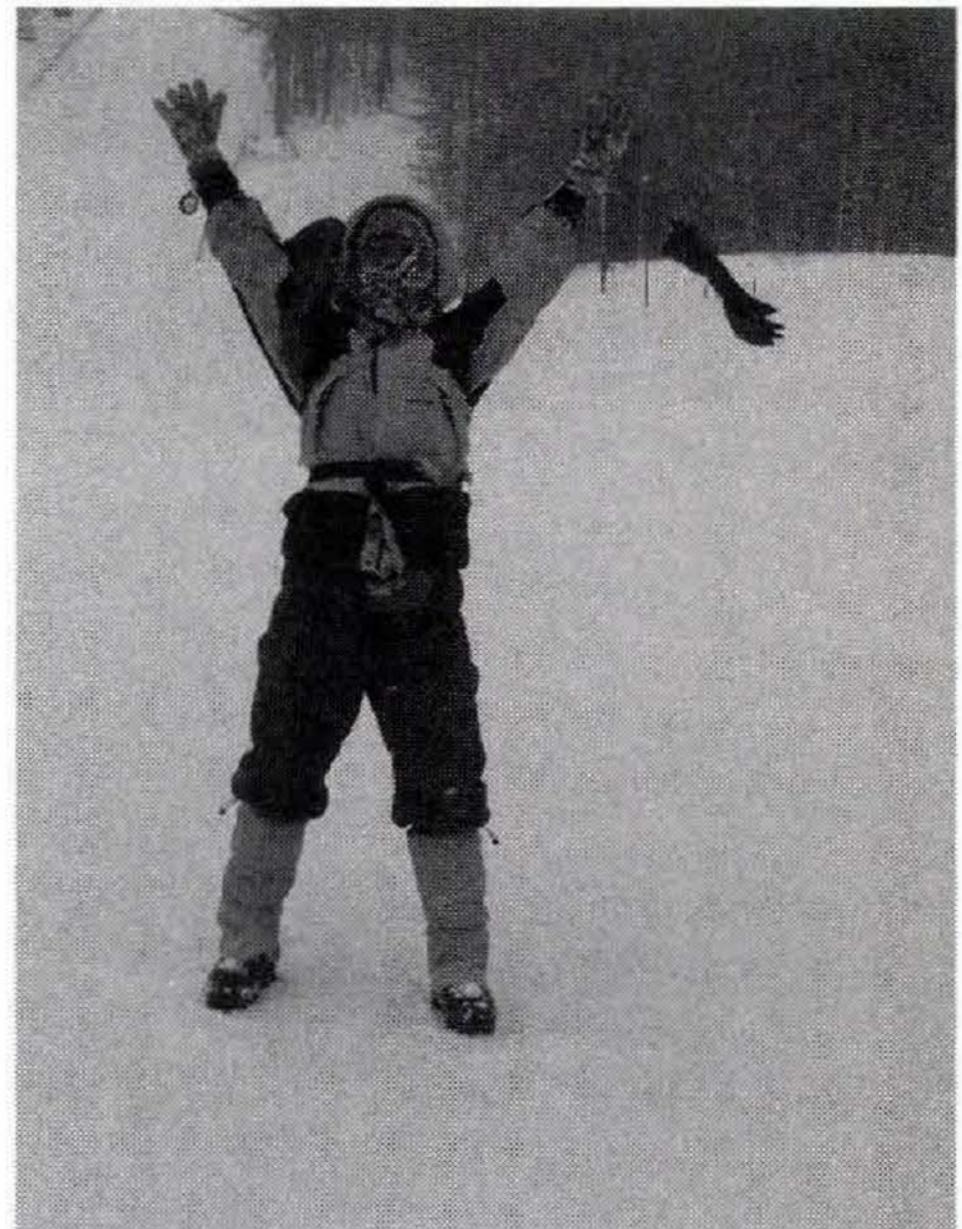
7時45分くろがね小屋発。小さな尾根をひとつ越え、沢に入つて距離を稼ぐ。視界不良、ルート判然とせず。尾根に出て標識、赤布に導かれ、先発組みを追い抜いて8時50分、安

達太良山頂。

9時、余り迷わず鉄山をめざす。飛ばされんばかりの強風、風を避ける岩陰もまれにしかない。狭い稜線はひたすら上り下りするが、沼尻からの合流点となる矢筈森周辺でちょっと広くなると、方向を定めるのがなかなか困難。2人で読図と目視で補正し合いながら、何とか歩をすすめる。目を覆うため新調したサングラスをかけるが、曇つてどうしようもない。やはりゴーグルか。大松君の目に随分助けられた。ごつごつした鉄山の切り立った嶺を上り下りすると、いよいよ尾根が拡がり、ルートファインディングに苦労する。

最後は大松君の目がほんの10メートルほど前の鉄山避難小屋を発見。ほつとする。11時、小屋に入つてしまふと、どやどやと第二陣。来るわ来るわ20人ほどの大パーティ。箕輪スキー場から登ってきたのだという。

11時30分、さあ、後は降るのみ。気分爽快。苦しかった風との戦いが頭をよぎって、これから道に対するはさほど警戒を感じなかつたのが問題のはじまりだつたろうか。登りと違つてスキーでの下りは、直滑降ではなく、右へ左への斜滑降で結構な距離を進んでもしまうものだから、視界がない中で容易に方向を失いやすい。地図と磁石で補正し続けな



とにかく真っ白。雪に覆われているのかどうかさえわからない。動きが取れない。間違なく雪に埋もれている右手のストックをあきらめ、何とか右手の自由を確保する。どうやら顔は埋まつていならしい。大丈夫だ。右足のスキーを外す。次は左足。どういう向きで埋まつてあるのかてんで予想がつかない。やつとのことでスキーを外し、次は掘り出しにかかる。スコップを持参しなかつたので、えらい手間がかかる。何とか右手に持つていたストックをはじめ全て掘り出した。

2人ともひどく興奮している。そう気付かれまいとしながら、互いが互いの動揺を痛いほど感じ合つてゐる。時刻は2時頃だつたらうか。鉄山避難小屋を出て2時間以上が経つていたはずだ。

僕の予想では地図に切れ込んだ1550メートルに達する深い谷の地点は越えている筈だった。ではなぜ、目の前の斜面がこんなにも急で、下に拡がる谷はあんなにも深いのか。疑念が疑念を呼ぶ。まさかスキー場上部を通り越し高森川に入ろうとしているのか。とにかく目の前の急斜面をトラバースすることは不可能だ。この急な斜面はどうに通り過ぎたと思つていた1550メートルに達する深い谷の地点と考える外ないのでないか、とすれば、谷は長くは続かず1459メー

トルのピークに達するはずだ。そこでトラバースして、箕輪スキー場のグレンデの途中に出ればいいのでは、というのが僕の考えだつた。大松君は降りることに反対した。谷はすぐに切れていてとても降りられない。確かに谷は目の前でぽつかりと小さな穴を開けていた。道に迷つたら谷へ降りるなどいう山の鉄則も頭に浮かんだ。

了解。登り返そう。大松君のシールが剥がれる。ガムテープを巻くのがもどかしい。時間が大分押し迫ってきた。14時だつたか14時半だつたか。よくてあと3時間。必死になつて登り返す。

フワツと足をとられて転倒して足下を見ると、なんと右足のシールがない。どこで落としたのか。いまここで落とす以外あるはずがないではないか。必死になつて掘れば掘るほど、転んだ場所も通つてきた道もはつきりと見つからない。断念するしかない。片足で、横登りをして高度を稼ぐほかあるまい。いつたんはそう決断するが、シールのない登りなんて、と大松君に諭されると、もう一度雪を掘つてみたくなる。時間はどんどんおして来る。15時か。いよいよまづい。

ついに決断し、シールをあきらめ、片足だけシールを付けての横登りを始める。すぐに

バランスを崩して転倒。安全金具が外れる。立ち上るとすぐに、スペツツのゴムが外れる。一動作一動作ごとに体力と気力を消耗していくのがわかる。

現在地はあつていいのか。よもや、とんでもない場所にいるのではないか。こんな急な斜面があるはずはないのではないか。

15時か。動けるのはせいぜい3時間。その後は冷たいビバークが待つていて。スコップ無しで雪洞を掘るだけの気力はとても残つていそうにない。燃料のE.P.Iもわざわざ小型のものを持参している。小さなツエルト一枚で銀マットもなしに一夜を過ごすのか。大松君の携帯か無線は通じるか。職場はなんと思うだろう。

7年前だつたか、近藤さんと西吾妻から谷地平を目指した縦走中、時間切れで東大巔かさあ、もういいだろ。トラバースを始める。程なく大松君が叫ぶ。「ちょっと待つください、もう、シールは張り付いていないのであきらめて剥がします」と。時間だけが過ぎる。後どれだけの時間が与えられ、どれだけの距離が残されているのか。

大松君のスキーはシールを外して軽快に滑る。願わくは登り返す必要がおきないことを。しだいに、ポツラポツラと樹林が出てくる。1本2本……。

箕輪スキー場から山頂を眺めると、案外密な灌木に覆われている。あの光景に近いのではないか。大松君と額き合う。もう少し、もう少しのはず。励まし合う。

しかし、今回、自分の位置に自信が持てないのは同じとしても、スコップのない、つまり雪洞のない樹林のない高所でのビバークに立つと斜面が切れた。目の前に人造物がある。ダムか。ん!? いつたい何なのか。ダムという考えに大松君は頷かない。リフトで

つらい一夜を過ごし、夜が明けたとして、再び吹雪が続ければ容易にルートは見いだせないだろ。食料は尽きる。体温は下がる。それでもルートを見いだせなければ……。

しよう。しかし、動いてはいない。箕輪なら動いているはずではないか。では、横向スキー場か。目を懲らす。やっぱり、箕輪でしょ。

大松君が強調する。動いてはいないが、確かにあの形は、幾度となく利用したことのあるあのリフトか。確信は持てないが、概ねそうに違いないと同意する。あまりに長かった時間が、そもそも想定していた目標地点に達しているという事実を否定したがっていた。

最後の急な斜面を、雪崩を気にしつつ、慎重にトラバースする。着いたと思った瞬間、もう1段の段差が隠れていて頭をがつんと強打する。が、到着は到着だ。

目の前のリフトを見ても、それが100%箕輪スキー場のものであるとは、なかなか信じられなかつた。で、なくて何であろうとは思うのだが、少しだけ疑念を残して、緩斜面を滑り始める。道の先にもう1本のリフトが動いている。

間違いない。箕輪スキー場に達したのだ。

三月会では「しま茜」しか飲まず、本間君などは月に一升瓶を六本も種子島から取り寄せているというのに高崎さんが来ないのは、どこに登ったか聞かれ「なし」と申告するのが嫌だからという説がありますが、今月は「なし」と申告した人が大勢います。そんなことにせす「しま茜」の消費を増やせばいいのに。（なしと言うのが悔しいと思う間は、登る

## 三月会通信

■1月16日■

出席者 石井右左平 山崎擴 佐薙恭 中川 滋夫 三井博 高橋信成 蝶川隆夫 竹中 彰 小島和人 西牟田伸一 山本健一郎

●懇親山行 大野山 2月18日

昨年の百蔵山・扇山が好評だったので今年もどこかに行こうということになりました。

お仕事をしていらっしゃる皆さんのお便りを考えて土曜日にしました。竹中くんが挙げた大野山、石割山、不老山などの候補から、孫さんを偲んで大野山に登ることに決めました。石原さん、高崎さんぜひご参加ください。幹事がレッド・キックをご用意します。

●山行予定  
山崎 恒例菅平スキー  
佐薙 2月15日丹沢

三井 宇都宮アルプス  
7月下 越後駒と中の岳 ニペソツ9月  
15日 11時千歳集合、2月末までに三井、蝶川宛申し込むこと（ニペソツはカムエクと並んで本当に佳い山、お勧めです）  
高橋 2月中国陝西省の嵩山と華山  
竹中 1月28・29日 雨ヶ岳（蝶川 本間）  
2月18日大野山

氣があるのだから有望と某先輩の声あり！）

●山行報告

石井 山崎 中川 三井 高橋 冬休み  
佐薙 大倉尾根から塔 2時間15分で登った記録を読み、試みに計つたら3時間半、切り上げれば80歳なのだから上出来（大山に行けば百回参詣の碑が沢山あると山崎さん、回数でチャレンジしてください）

蛭川 1月5日 高尾山 日影沢に降りる  
小島 箱根湯本で池知・半場くんと風呂に入つた

西牟田 帰国した金子くんとの山行11回  
山本 日影沢で14・15日 炭焼きのボランティア

蛭川 2月下旬二十六夜山（相模湖に寄つた

方）山崎さんより旧暦の26日夜に市が立つ

た場所、月の出が遅く一晩中楽しめるので

この晩が選ばれたとの解説あり。26日に行

こうよ

小島 安達太良と北沢峰のセンチメンタル

ジャニー企画中（渡辺くんに知らせたら）

山本 4月中旬 猿が馬場 野伏 7月7日

ペテガリ 11月初 大峰 1月下 和名

倉山

### 鈴木牧之著「北越雪譜」のこと

大雪のニュースで津南に4メートル近い雪が積もり、栄村との交通が途絶したと伝えられました。ここは秋山郷だと気がついて、早く速「北越雪譜」を取り出しました。この本は岩波文庫にもありますが、私のは岩波クラシックスの第1巻、文庫の2倍のサイズ、図版も活字も大きく読みやすいのでお勧めです。このシリーズの第2巻はマックス・ウェーバーの「職業としての学問」、3と4はウインバーの「アルプス登攀記」（勿論浦松さん訳）、5が「ガリバー旅行記」、その他、女工哀史、おくのほそ道、フランクリン自伝、この人を見よ、論語、オイディップス王、ルバイヤート、福翁自伝、東海道中膝栗毛、ギリシャ・ローマ神話などが収められており、とても私の脳

味噌では隨いていけません。ただ「アルプス登攀記」はワインパーの挿絵が文庫版より大きいので楽しめます。

北越雪譜はまず「およそ天より形を為して下す物、雨、雪、霰、霧、雹なり」となかなか科学的な記述があり嬉しくなります。ウォルトンの釣魚大全には鼠がナイル河が氾濫すると水面を照らす太陽の熱で発生するとか、鰐が地上の腐敗物の中から生まれるなどと書いてあり楽しい読み物ですが、それよりずっと科学的です。ただ両書の刊行には二百年くらい隔たりがあります。

雪の形と言う所には35枚の雪片のスケッチがありますが、中谷先生顔負けの正確な六角形です（こうなると中谷宇吉郎隨筆集、さらには寺田寅彦隨筆集も読み返さなくてはと書棚を見たらどちらも揃っていたので安心しました）。おまけに物の数は偶数が陰、奇数が陽なので男の体（陽）は九出し女の体（陰）は十出すとあり、その差は男根と双乳だと解説しています。大変明快な説で良く分かります。

その他にも白い熊の子を捕まえた話（目と爪が赤いと書いてあり、アルビノは色素不足が原因で目の様に血管が表面近くにあるところが赤いのが特徴ですから、作り話ではなさそうです）、冬眠中の熊の穴に落ち掌を嘗めさ

せてもらい生き延びて家に帰つたら家族が集まって四十九日の法要の最中だった話（掌は蟻の味がしたそうです）、狼に家族を殺された話など動物とのかかわりを伝えたものが多くあります。

また鮭の話も多く、三面川のあの辺りまで遡上していたのでしょうか。その中では鮭漁に行つた夫を迎えて行った妻が、大漁なのでもう少し続けると言われ、松明を枝に挟んで帰つたところ、燃え尽きた松明が命綱に燃え移り、夫が死んでしまったという悲しい話もあります。

秋山郷の古風という項には小赤沢の戸数28軒、和山5軒とあり、「ほふそふあるむらかたのものはこれよりいれず」との高札があり、部落に着いたらまず疱瘡持ちではないか聞かれたとか、小赤沢で摺鉢のある家が1軒、鏡を持つ女は5人だが女の子は美人揃いとか興味深い話ばかりです。今の小赤沢何戸ぐらいあるのでしょうか。

先年秋和田小屋から苗場に登り暗くなつて小赤沢に降りてきたのですが、部落にはいつも道端の家の明りが点いていません。みんな廃屋なのかと思い国道に出て、ビールの販売機にコインを入れたら電源がきれています。信号だけが点滅していますが、国道沿いの家も真っ暗です。廃屋が多いと話しながら

ヘッドランプ頼りに宿に着いたら、家族総出でランプの手入れをしていました。秋山郷一帯が停電しているとのことです。信号機の電源だけ別系統なのだそうです。ランプの明りでの夕食までは良かつたのですが、ポンプが動かず水の出が悪く、温泉が熱すぎてへこたれました。

また破目山（巻機山）のこと、苗場山登山の記録もありますが、頂上から佐渡や富士山が見え「そのまま雪の一握りを置くが如し」と書いてあります。1811年8月23日のことで、頂上に小屋があり一夜を過ごし下山します。ところが昭和15年7月の「山溪」に武田久吉博士が、昭和13年の8月、山頂近くに1週間も滞在し、素晴らしい天気にも恵まれたが富士山は見えなかつたと牧之の説に疑問を投げ掛けました。しかし現在パソコンの計算で白砂山の西肩上に見えることが証明され、実際に見た人もいる様です。私は先年8月20日に平ヶ岳から富士山を見ました。台風接近で関東平野は雲に覆われ、その上に二千メートル以上の山だけが頭を出していました。その他にも浦佐のお祭りなど興味深い話ばかり、ぜひお読みください。

この記録随分長くやつてきましたが、大損していたことに気が付きました。私が皆さん

の放談に耳を傾けメモを取つてゐる間、躾けの悪い後輩どもは勝手に呑んだり食つたりしています。そして勘定は割り勘なので適います。文句をいつたら引き受けるという奴はなく、勘定を無料にするという奴がいました。そんなことをしたら死ぬまでこの役から免れられません。来月から記録は回り持ち、最後の落書きだけ跡継ぎが育つまで引き受ける事にします。

### 躾の悪い後輩から一言

そもそも、この有志の会を針葉樹会の中にスタートさせ、育てて来られた山本先輩のご努力には頭が下がります。お陰でこの会の中から幾つかの楽しい山行（屋久島、利尻など）

が生まれ、恩恵に浴した一人として感謝に耐えません。然し、何時までも山本さんに元気にしてこの会に出席頂く為にも記録ならびにコラムの作成をお願いしたいと考え、失礼ながら記録担当も兼ねて出席を半ば義務化することで、ハリも出るのではないかと考えております。出来れば永久に続けて頂ければ……。

（竹中）

### ●懇親山行 2月18日 大野山

参加者 石井 左右平 山崎 擴 佐薙 恭 中川

滋夫 有賀 盈 三井 博 高橋 信成 本間 浩  
竹中 彰 蝶川 隆夫

わたしは風邪を引いて欠席しましたが、変なノートに「このデータをどう料理されて、またどんな隨想を加えて議事録としてまとめられるかたのしみにしています」なんて添え書きが届きました。ノートには山行記録と予定が書いてあるだけです。わたしが休んだ時くらい代わろうという奴が一人もいないとは呆れた話です。おまけに酔っ払いの字は崩れていて読みにくいものです。（山本健）

■2月20日 ■

出席者 石井左右平、山崎擴、佐薙恭、中川滋夫、有賀盈、三井博、高橋信成、本間浩、竹中彰、蝶川隆夫  
大野山で思い出すのは中川孫さんのこと、

わたしが学生の頃ザイルは高価で、山岳部の予算のかなりの部分を占めていました。これを知った孫さんが「俺が手に入れてやる」とおっしゃる。といつてもザイルのこと、怪しげなものでは困ると思ったら、何と東京製綱のザイルでした。孫さんはセメント会社にお勤め、皆さんご存じの通りセメントは石灰石をキルンで焼成してクリンカーにし、これを出荷する時に粉碎します。石灰石掘削に従事している従業員の安全のため会社でザイルを大量に購入していたようです。

### ●山行報告

山崎 2/20 鷹取山

高橋 1/29 大山 関東ふれあいの道 ヤ  
ビツへのバスが路面凍結で運行せず、蓑毛から登り、見晴台経由、下社へ。温泉に入り帰宅

本間 2/11 一人で王岳 2/12 蝙川君家  
族と三ツ峠、清八峠には行かず  
竹中 1/28 ~ 29 雨ヶ岳、身延山 蝙川夫  
妻ほか

佐藤 1/24 丹沢 小丸から塔のトレーニングコース

●山行予定  
矢倉岳と幕山 (3月4~5日)

坂井(山本) 益弘くんの呼び掛けで、高橋、蛭川、本間、竹中、半場、村上君など大勢集まり、真鶴に泊まるそうです。

山崎 1/28 菅平スキー

高橋 3月初 奥多摩の楓寄山

中川 4月 毛無山

有賀 近郊の山でトレーニング

本間 3/25 節刀ヶ岳と破風山(黒岳の西の山のことかね)

蛭川 3月 茂来山 山本尚 倉知君の計画  
望月さんの「静かなる山」に出ていたと思  
います。倉知くんも渋い山に登るようにな  
ったようです。山本君はまたどこかの酒  
蔵に寄るのでしょうか?

佐藤 ラウンド丹沢(3~12月) 大山から不  
老山まで、日帰り数回で完結。D.フレッ  
シュフィールドの「ラウンド・カンチエン  
ジュンガ」の丹沢版とは少し大袈裟かな?

5月 北アルプス、穂高辺り

近所の酒屋に輸入元を教えて取り寄せることにしました。何となく鄙びた手作りの味がして、飲み飽きないビールです。小瓶と缶があり、瓶のキャップは栓抜きがなくてもひねると取れるようになっていて、わずかに瓶の方の味が缶より美味しく、瓶入りを取り寄せていました。酒屋のおばあさんは名前をおぼえられず、山本さんちのビールと呼んでいましたが、数年前から手に入らなくなりました。扱い量が少なく儲からないので問屋が輸入を止めたようです。磯野先輩がご存命ならこれを輸入してくださいとお願いに行きたいところです。

EXIN というブルゴーニュの赤ワイン、フ  
ランス語に弱いのでなんと読むか分かりませ  
ん。だいぶ前にスーパーで安く買って飲んだ  
ら美味しいのにびっくり、せつせと飲みまし  
た。ヒュー・ジョンソンのワイン年鑑をみた  
らあのシャンベルタンの北隣りの畑で、品質  
の割にアンダーエステイメントされていると  
評が出ていました。わたしは大喜びでこれを  
愛飲していました。ところが3年ほど前から  
じりじり値上がりし、この頃は店頭で見掛け  
なくなりました。わが家の在庫もあと2本です。  
LAGAVULIN というシングルモルトのウイ  
スキーがあります。シンガポールにいたとき  
英國人のクラブに潜り込んだので、バーにあ

この題が分かる人は酒通です。繰りを忘れましたが、「ヘンリー・ワインハード」というアメリカ中部のビールが好きでした。何かで飲んだのが病みつきとなり、明治屋から自宅に送らせていましたが、送料がかさむので、

るシングルモルトとの付き合いが始まりました。最初はグレンフィデック、そしてマッカラ

ランからシングルモルトの遍歴が始まりました。産地は大別するとアイラ、ハイランド、

スペイサイド、キャンベルタウン、ローラン

ドくらいに分かれるのですが、もつと大まかにいえば北と南と西のアイラ島の三つと考へても良いでしょう。北の方にマッカラ、グレンモーレンジ、クライヌリッジなど有名な

醸造所がありますが、アイラ島では燃料の泥炭にヨードが多く含まれているのでヨード臭の強い独特のウイスキーが出来ます。

LAGAVULINはアイラのウイスキー、癖のある味ですが癖が上手く調和してバランスのとれた味になつていて好きな銘柄です。ところがこれにも異変が起きました。4年くらい前までは1本3000円そこそこで買ったのですが、店頭から姿を消しました。そして1年ばかりしたら同じものが7000円以上に値上がりしました。それだけ出せばマルテルのコルドンブルーとかヘネシーのX.O.が買えるじやありませんか。腹立しい限りです。

といった次第でわたしの選択の余地は狭まっています。本間くんを見習つてしま茜専門になろうかと思っています。わたしが今何を飲んでいるのかと聞かれても、これだけ苦い経験をしているので皆さんに教える訳には

いきません。悪しからず。

(山本健一郎)

## ■3月20日■

出席者 石井左右平、山崎擴、佐薙恭、高崎治郎、中川滋夫、山本尚健、三井博、高橋信成、蛭川隆夫、本間浩、小島和人、山本健一郎

### ●山行報告 冬枯れで多くありません。

山崎 渋沢丘陵などの里山歩き

山本尚 3月15日 倉知、蛭川と御座山

10年くらい前蓼科から日帰りしました。すぐ後からうるさい婆あが3人登つてきて、「ちがたけときんがたけ」が見えてるとわめきました。私は丁重にそんな山は知らないのですが、どれでしょかと聞きました。敵は得意げにあれよと指差したので、わたしには「かやがたけとかながたけ」しか見えないのですがとつぶやいたら、あつという間に消えてしまい、静かになつた山頂でゆつくりと昼食を楽しみました。

### ●山行計画

石井 山崎 未定

高崎 春日井さん遺愛のストックの使い初めにどこか

佐薙 3月30日と31日 ぐるり丹沢の第一

弾 蛭と大室

5月岳沢

山本尚 守屋山、入笠山。 霧訪山もいい山

です。お勧めします。

中川 毛無へ河口湖から日帰り

三井 宇都宮アルプス、5月連休は台湾の玉山。だめなら愛鷹とは落差が大きい。

蛭川 4月桃の花を見に山梨の軽い山、5月長九郎山

本間 佐薙さんとの丹沢、9日弘法山でお花見、15日清八山から鶴が鳥屋山

山本健 24日から猿が番場山、野伏

ダツチオーブン料理が売り。

三井 奥多摩の戸倉三山、結構長いようです。

走行7時間半と書いていますが、まさか走つたのではないでしょう。

山本健 15日風邪を治そうと大倉尾根、息が切れてへとへと、欲張って鍋割に回つたら大倉の蕎麦屋は終わつていて、満月が上のを観賞できました。

## 盲亀の浮木

三十数年勤めた会社を辞めることになったとき有志が送別会を開いてくれた。その席であるやつがもとも印象にのこる出来事は何かと聞いたので、すかさず昭和42年に会社を4ヵ月休んでヒンズークシの遠征に行つたことだ、あんなに素晴らしい思い出はないと言えた。そしたらみんなが呆れて、俺たちは会社勤めの中でのことを聞いていたのに、会社をサボつたときのことを言うのは図々しいと言われてしまつた。

しかしながらといつてもこれがわが人生で最高の出来事なのだからほかに答えようがない。でもあの時はひどかった。組合の専従書記長、副委員長、副委員長と3年も組合の仕事に専念した後が遠征隊長なのだから、よく首がつながつたものである。

それでも帰りの電車の中で少し反省して、会社生活の中で出会つた最高の出来事はなんだろうと考え、思い出し笑いをしてしまつた。これも仕事と関係がないのが玉に瑕だが、まさに盲亀の浮木、嘘のような本当の話を綴つてみよう。

遠征から5年程が過ぎ、私も同期生より少し遅れたが課長になり、転勤した新橋支店で貸付課長になつた。地方に赴任する前任者と10日ばかり挨拶回りを済ませ、ようやく自分

の席に落ち着いて座つた私に女性のボスが、

課長お願いがありますと話しかけてきた。この人を味方にしなければ新米の課長は務まらない。何ですかと聞いたら前任の課長が転勤が決まったときに女性の皆さんで飲みなさいと「ブドー酒」を2本置いていつたが、私たちにはジュースのほうが良いので、グレープフルーツ・ジュース2ダースと取り替えてくださいという。当時グレープフルーツ・ジュースは売り出されたばかりで、ほかのジュースより高かつたけれど、嫌だと言つたら後のために恐ろしい。すぐに言われるままに2ダース分の代金を渡した。取引成立に満足した彼女は意気揚々と引き下がり、やがて桐の箱を私の机の上に置いていった。おや、そこそこのワインらしいと思い、これはどうしたのと聞いたら、昨年、支店開設30周年のお祝いにある取引先からいただいたものとのことです。どこにおいてあつたと聞いたらなんと金庫室の中だというので、一夏無事に越していくだろうと安心した。

ふたを取るとまず赤ワインのラベルが目に入つた。何度読んでもラファイット・ロートシールドとしか読めない。ロートシールドのラベルにはロートレックの絵があると何かで読んだが、それらしい絵も描かれている。周りの奴らに顔を見られてはならじとしばらく

顔を挙げられなかつた。

気を落ち着かせ白ワインのラベルを見るがこの方は味も素つ氣もない筆記体の文字が印刷してあるだけである。ユ?いやユキム、待てよ小文字のdが前にある。フランス語がだめな私にも、これは世界一の白ワイン、シャトードイケムらしいと分かり、呆然と箱の中の2本のワインを見つめるばかりだつた。

昼休みを待ちかねて私は明治屋に飛んでいった。さすがに磯野先輩の店、奥の冷蔵室に同じラベルのワインがあり、2本合わせた値段は10万円近い。そこで今度は丸善に向かい、年鑑類を立ち読みしてロートシールドは最上の年、ディケムは普通の年のものと知つた。こうなると午後は気もそぞろ、仕事が手につかない。深見教授の証券市場論の講義で、先生は黒板に盾の図柄を書かれてロートシールドは赤い盾のこと、またロスチャイルド家にもつながると教わったのを思い出した。当時の私のボーナスの手取りは10万円に及ばず、1ドルまだ360円の時代、贅沢品には高い関税がかかっていた。

この箱をしつかり抱きかかえて家にたどり着いたときは緊張でかなりくたびれていたが、とにかく2本とも冷蔵庫に入れた。当時の冷蔵庫は小さく、家内がほかのものが入らなくなると文句を言うが、有無を言わざり

まいこみ、火事や地震のときにはこれを持ちだせといった。

こうなると落ち着かない。2週間ほどした日曜日の午後まず普通の年とされるディケムを開けることにして、前の日にはワイングラスを買い込んで帰宅した。コルクを抜いたとたん甘くふくよかな香りが舞い上がり、グラスに注ぐとその色がまたなんともいえぬ琥珀色、口に含むと秋晴れの太陽の味がした。あのときの感激は今でも鮮やかに思い出せる。この世の中にこんな素晴らしい飲み物があるのか、こんな飲み物があるフランスとはどんな国なのか、当時まだフランスに行つたことがなく、行けるとも思つていなかつた私は想像するだけだった。

ワインの知識に乏しかつた私は、けち臭いことに半分くらい飲んで残りは明日飲もうと栓をして冷蔵庫にしまいこんだ。次の日に飲んだら味はまあまあだつたがあの香りが失せていて、しまつたと思った。こんな上等なワイン、今なら開けたらすぐに飲んでしまうのだが、勿体ないことをした。この後ディケムは3本買つて飲んだがそれだけの値打ちがある。ただこれを1本あけるとややもてあります。先年、松坂屋でこの小瓶を見つけ手に入れてきたが、休日の午後に飲むのに手ごろな量で、懐の痛みもすくない。

ロートシールドのほうはボーナスを貰いわが家でもステーキを焼くというのでこの機会に呑むことにした。朝、冷蔵庫から取り出し室温に温め、コルクを抜いた。ところが味も香りも先日ディケムのような感激は味わえない。なんだか渋くて重い味、正直のところ美味しいと思えなかつた。このころ私はまだ上

等な赤ワインの味を知らず、勿体ないことをしたものである。その後私は外国の取引先を接待する席で、2度ほどロートシールドにありつく機会があつたが、そのときは味が分かるようになつていて、しみじみと美味しくいただくことができた。この方はまだ自腹で飲んだことがなく、申し訳ないので1本買ってみようと思案中だ。しかしわたしはロートシールドを買つたなどと口を滑らせるようなお人好しではない。

あの2本のラベル大切にしまつたはずだが、見つからないので何年物だか分からぬのが残念である。

■4月17日■

●山行報告

出席者 石井左右平、山崎擴、佐薙恭、有賀盈、三井博、遠藤晶士、高橋信成、蛭川隆夫、竹中彰、小島和人、本間浩、小野肇、

山本健（文）

遠来の常連小野君、久しぶりの遠藤君なども現れ予約した席がいっぱいになりました。小島君はザックを買ったそうですが、30リットルとは志が低い、せめて30ガロンくらいの大きさにしなさい。

山崎さんは地元の地質と考古学のグループに入り、ハンマーを要るそうです。不要になつたハンマーをお持ちの方は差し上げてください。わたしの横浜の友人夫婦はこの8年7・8・9の3ヶ月旭川にマンションを借り、山登りをしています。家賃は月8万円だそうです。小野君は1000万くらいで札幌に手頃な物件が買えるというので、みんな心が動きました。誰か買いませんか。

山崎 3／25 鐘ガ岳 4／3 石老山 同行  
佐薙 3／24 大山 3／30・31 檜洞丸  
石井  
大室山 本間、山本  
三井 4／13 宇都宮アルプス  
本間 檜洞丸・大室山のほか4／15 清八山と鶴ガ鳥屋山  
小野 4／10 手稻山 山スキー 4／15 御

前山 もちろんこちらは奥多摩の山です

小島 ドンデン山を見ただけ この夏は北岳に来ただけと言えるように頑張るぞ

### ●山行計画

中仙道 馬籠から中津川 4/21・22 石井、山崎  
岳沢合宿 5/12・15 佐薙、上原、倉知、竹中

太刀岡山 4/19・20 蝶川、小野、竹中  
天城山 長九郎山 大沢温泉 5/10・11  
石井、山崎、高崎、本間、蝶川

木曾御岳 4/21・22 小野、兵藤  
ニセコから目国内岳 5/3・5 山スキ

谷急山 5/7 三井 白神 5/26・  
29 蝶川 入笠山 6/17・18 蝶川

白馬岳 8/2・4 高橋、小野 大雪渓を登り、鎧温泉に回ります。

### 4月はマタイ受難曲

わたしの勤め先では望月達夫さんが始められた「信託ニュース」という従業員向けのP R誌が毎月配布されていた。例年4月は新入社員向け特集になっていたが、ある年役員のプロフィル紹介が載った。趣味とか座右の銘などのアンケートに加え好きな歌という項目が

あつた。新入社員が聞いたこともなさそうな大昔の歌をあげる人、孫にでも教わったような最新曲を人気取りにあげる人など、さまざま面白かった。ところが硬骨をもつて知られるKさんが「マタイ受難曲」と回答しているのを発見、やつたぜKさん。だけどこの曲を知っている新入社員がいるのか怪しいものですよとつぶやいた。

研修を終えた新人が20人ばかり国際部にもやつてきたので、懇談の機会にわたしはあのアンケートを読んだかと聞いてみた。そしたら一人が手を上げ「マタイ受難曲」がお好きな役員がいらっしゃる会社に入れて光栄に思いましたと答え、もう一人も同じ感想を漏らした。これにはわたしのほうが驚き新入社員もまんざらでもないと思った。

それから何年かした4月CDの店で何か聞くものがないかと物色していく今週は復活祭だと気がついた。復活祭にあわせて日本でもよくこの曲が演奏されるし、バッハがこの曲を作ったライブチッヒでは、「マタイ受難曲」と「ヨハネ受難曲」が毎年交互に上演されと聞いている。そういえばわたしは「マタイ受難曲」のさわりしか聞いていない。よし全曲通して聞いてみようリヒターの旧盤(59年)を買い込んだ。そのあと聴衆のすり泣きの声が入っている1939年録音のメンゲ

ルベルク盤、ショルティ盤、シェルヘン盤、リヒターの新盤など毎年4月に買い入れてこの曲のCDが大分増えた。

そこである時物好きにも聞き比べを試みたがこれは大変だった。まず片方の第1曲を聞きメモを取る。それからもう一方の第1曲と第2曲を続けて聴く。今度は最初の盤の第2曲と第3曲に移る。その辺でチャイムが鳴り宅急便が来るので興をそがれる。気を取り直して聞き進むと、家の仲間からの電話だ。応対もつづけんどんになるのはやむをえない。そのうちに集中力が途切れ、膝より前に出ていた頭が膝より後ろになるとメモなど忘れ聞くだけになる。苦行7時間以上で聞き比べは終わつたがどっちが良いんだか結論が出ない。5組の聞き比べの組み合わせは5の階乗の半分?と気がついて、聞き比べはやめてしまつた。

あるとき日本山岳会のルームでこの話をしたら、マタイ受難曲とはどんな曲ですかと聞かれ、クラシック音楽のエベレストですとわれながらうまい答えができた。ところが相手は山にかけてはうるさい連中、すかさずK2とカンチエンジュンガに当たるのはどんな曲ですかと聞かれ、すぐには答えられなかつた。エベレストにバッハの作品を充てるなら、次にはモーツアルトとベートーヴェンの曲を

持つてくるのが妥当だろう。さしつけずつきりした山容のK2にモーツアルトの41番の交響曲かレクイエム、どつしりしたカンチエンジュンガにはベートーヴェンの交響曲第9番あたりが似合いそうだと思うが皆さんのご意見はいかが？

この曲をまだ聴いたことがない人は死ぬまでに第1曲と最後の曲だけでも聞いたほうがよい。そこで僭越にも1組推薦しようと思つたがわたしの手に負えそうもない。

マエストロといわれる指揮者たちがみんな一度は振つてみたくなるらしく、30か40くらい出でているようだ。カラヤンまで吹き込んでいる。豪華な独唱者を集めており、心が動くがとんでもなく綺麗な極彩色の絵巻物を見せられそうで買う勇気が出ない。

できました。5月上旬に海外の百五十の山岳団体・図書館と六百人の登山家・山岳ジャーナリストに発送しました。昨年十月十五日の百周年記念祝賀晩餐会の折、海外から主賓として招待したアメリカ山岳会会長マーク・リッチーさんはスピーチのなかで Japanese Alpine News のことを下記のように持ち上げてくれました。

## 日本山岳会英文ジャーナル百周年記念号

### PART 1 日本の登山と探検の一世纪

W. ウエストンと黎明期の日本登山界 宮下 啓三  
日本人の信仰登山と近代登山 池田 嘉伸

日本のアルプスから世界の山々へ 山森 欣一

日本人の初登頂後、未登のヒマラヤ7000m峰

14座

極地圏における日本人の探検とアドベンチャー

中央アジア・チベットにおける日本人探検家 金子 民雄

日本の地図および地図製作 長岡 正利

河口慧海のチベット潜入の足跡

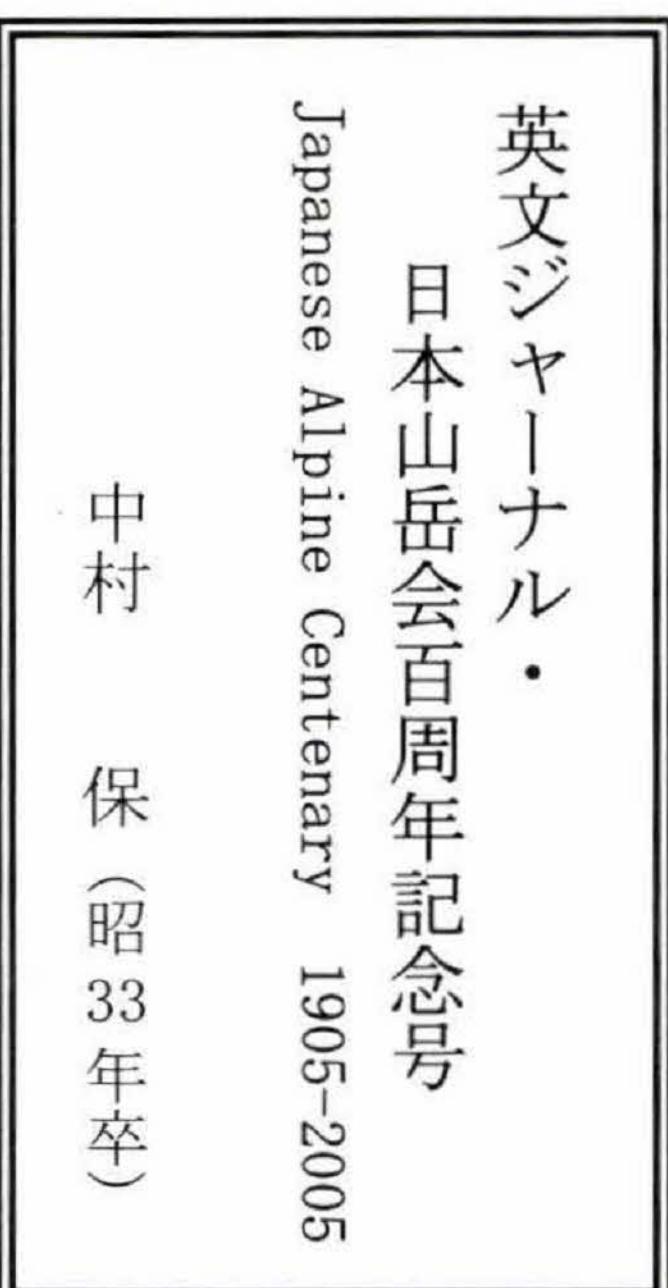
高山 龍三・大西 保

ヒマラヤの東・チベットのアルプス—概説と未踏の6000m峰200座

世界の山における日本人の初登頂・初登攀のリスト (除くヒマラヤ)

中村 保  
児玉 茂

に尽きます。海外からの反応は好評です。内容を示す目次（抜粋）は次の通りです。一部の翻訳を倉知敬さんにお願いしました。



広範に亘る内外の執筆者のご協力をえて、Japanese Alpine Centenary を発行する」とが

外交辞令・お世辞半分としても編集者冥利

PART 2 2005年価値ある記録  
A クライミング  
チベット—カルシュン峰6647m初登頂  
チベットのマッターホルン—カジヤチョ6447  
慶應大学体育会山岳部 河西瑛一郎

m 初登頂 英国ミック・ファウラー  
チベット—中央チベット・ドブゼボ 6400 m 初  
登頂 登頂

新疆省—崑崙ユメ・ムスターク 6345 m 初登頂  
英國隊マーチン・スコット

新疆省—崑崙ユメ・ムスターク 6345 m 初登頂  
A A C K 伊藤 寿男

新疆省—崑崙ユメ・ムスターク 6345 m 初登頂  
A D H M ラヤ登山・6000 m 峰初登頂

新疆省—崑崙ユメ・ムスターク 6345 m 初登頂  
J A C 東海支部 鈴木 常夫

新疆省—崑崙ユメ・ムスターク 6345 m 初登頂  
A D H M ラヤ登山・6000 m 峰初登頂

新疆省—崑崙ユメ・ムスターク 6345 m 初登頂  
A L A S C A — D E N A R I ・ D A I Y A M O N D 、 H A N C H I N T O N 登攀  
横山 勝丘

新疆省—崑崙ユメ・ムスターク 6345 m 初登頂  
A L A S C A — D E N A R I ・ D A I Y A M O N D 、 H A N C H I N T O N 登攀  
中村 保編

新疆省—崑崙ユメ・ムスターク 6345 m 初登頂  
A L A S C A — D E N A R I ・ D A I Y A M O N D 、 H A N C H I N T O N 登攀  
出和也ほか

新疆省—崑崙ユメ・ムスターク 6345 m 初登頂  
A L A S C A — D E N A R I ・ D A I Y A M O N D 、 H A N C H I N T O N 登攀  
横山 勝丘

## B 中国四川省

四川省—チヨンライ山系・ポタラ山 5428 m 北  
壁初登攀 山野井泰史

四川省—チヨンライ山系・Eagle Rock Peak 初登頂  
スイス隊

四川省—チヨンライ山系・岩峰群二つの初登頂  
アメリカ隊

四川省—チヨンライ山系・Bipeng 谷の岩峰初登頂  
アメリカ隊

四川省—夏塞 5833 m 初登頂 カナダ/NZ 隊

四川省—海子山 Mt. Yala 5820 m 西稜挑戦  
中国・アメリカ隊

四川省—西部未踏山域の探査  
長野山岳協会 古畠 俊彦

四川省—ガンガ山塊偵察  
山梨山岳連盟 青木 茂

四川省—大渡河流域の未踏の山と忘れられた遺  
産・石塔群 中村 保

(以下略)

## 編集後記

◆今号は久しぶりに計報なしでゆけるかと思  
いましたが、残念ながら横山皖一先輩（昭和27  
年卒）が5月29日に亡くなられました。心よ  
りご冥福をお祈りいたします。

編集幹事の仕事に携わって3年がたちまし  
た。この間、原稿集めで強く感じていることで  
すが、仕事が忙しくて書くだけの気分的余裕が  
ないという現実のほかに、書く材料はありなが  
ら何故か遠慮している方が多いのではないか  
ということです。編集子からの依頼に応じてひ  
とたび筆を執るや素晴らしい読み物を書いてひ  
いただいたという例が多くある度にその感を  
強くします。どうか皆さん遠慮なく気軽に編集  
幹事をはじめとしてお声をかけてください。

原さんのカイラス紀行楽しく読みました。五  
千メートルの峠を越えるコースを軽々と踏破  
する様子に羨望の念を禁じえませんでした。  
60代も半ばに近づく頃から体のあちこちに不  
具合が生じて、だんだん行きたい山々が遠のい  
てゆく悲哀を味わっています。皆さん、行きた  
い山は早めに登つておきましょう。いわば時間  
との競争になりますから。

(有賀)

◆中村さんの Japanese Alpine Centenary が送ら  
れて来た時、いやあスゴイもんを作ったなあと  
感動して、すぐさま制作の苦労話を書いていた  
だこうとお願いしました。でも、考えてみたら、  
そういう事は酒を飲んだときの話柄にはして  
いません。スペースの都合ですいませんが目次の  
部分を割愛させていただきました。

(井草)